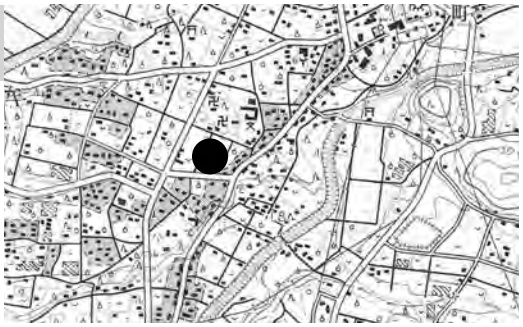
野添（のぞえ）遺跡（本発掘調査B）


調査地点（1/2.5万「豊橋」）

所在地　豊橋市石巻本町地内
（北緯34度47分55秒　東経137度26分15秒）

調査理由　道路改良工事（交付金）東三河環状線

調査期間　令和4年7月～令和5年1月

調査面積　4,055㎡

担当者　樋上 昇・池本正明・田中　良

調査の経過　調査は愛知県建設局道路建設課東三河東建設事務所による道路改良工事（交付金）東三河環状線に伴う事前調査として、愛知県県民文化局を通じた委託事業として実施した。本遺跡は平成25年度に2,000㎡の調査がおこなわれた。今年度は、前回調査地点よりも高位の段丘上を4調査区に分け、22A区・22Ba区・22Bb区・22C区として調査を実施した。調査面積は4,055㎡である。

立地と環境　遺跡は豊川左岸の河岸段丘の縁辺部に立地し、東側には神田川沿いの低地がある。調査地点は、河岸段丘上に位置し、平成25年度調査地点は低地および段丘崖にあたる。遺跡の周辺には、神田川沿いの低地に弥生時代中期から後期、中世を主体とする東下地遺跡がある。

調査の概要　調査は、西側の22C区から東へ順に開始した。現在は、耕作地であり、遺物包含層が残っていなかったため、地山であるシルト層の上面で遺構検出をおこなった。その結果、区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が、計4箇所検出された。また、掘立柱建物跡は8棟確認された。出土遺物には、大量の内耳鍋片や土師皿などの土師器、天目茶碗などの陶器片、磁器片、鉄滓などがあり、時期は16世紀～17世紀前半が主体となる。中には、須恵器や山茶碗など一部古い時期の遺物もある。さらには、縄文時代まで遡る石器も出土している。

２２Ｃ区　22C区では、16世紀から17世紀前半の区画溝と掘立柱建物跡からなる区画が、調査区北側と南側の2箇所から検出された。調査区中央では、東西方向に伸びる区画溝が検出され、こちらは前述の区画とは時期が異なると考えられ、近世の区画溝の可能性がある。

南側の区画は、148SD・160SDの区画溝と掘立柱建物跡02・03の組み合わせからなる。また、柱穴は布掘り状の掘り方をもつ。掘立柱建物跡01は、上記の区画より新しいもので、一部の柱穴は区画溝の上から掘り込まれている。

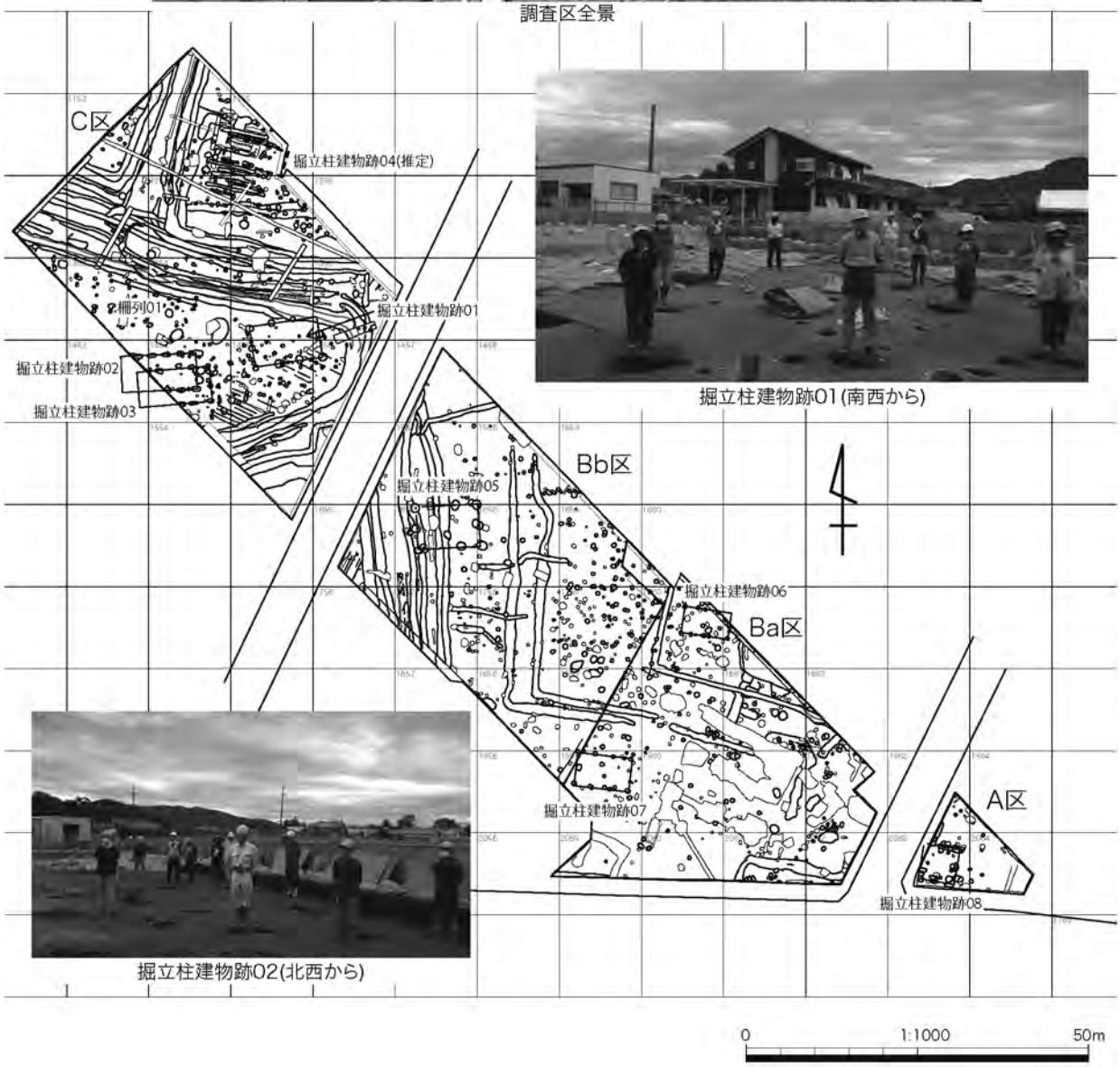
北側の区画は、123SD・231SDの区画溝と掘立柱建物跡04の組み合わせからなる。この区画は、他にも柱穴が複数あり、別の掘立柱建物跡もあると考えられるが、調査区外にも一部柱穴が伸びるため、現状では組めていない。

１５３ＳＤ　153SDは、区画溝148SDより新しい溝で、調査区よりも南西にまっすぐ伸びると考えられる。この溝からは、志野焼の碗が出土していることから、17世紀前半以降と考えられる。

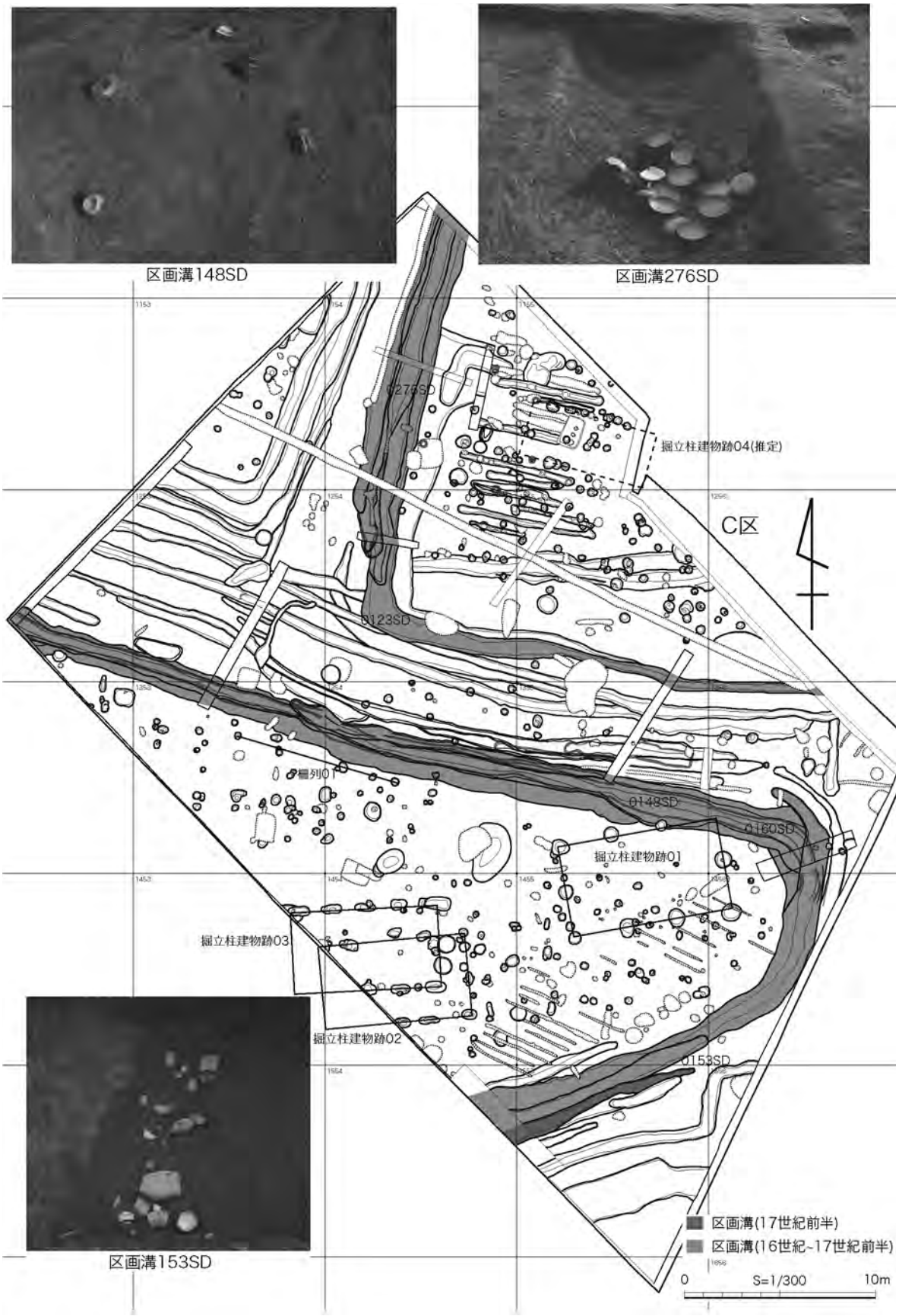
１４８ＳＤ　148SDは、南側を区画する区画溝で、幾度となく掘り返されている。東側が新しく掘り返されており、遺物の出土が少なく、西側では内耳鍋片を主体とする遺物が多く出土している。時期は、16世紀から17世紀前半と考えられる。

２７６ＳＤ　276SDは、区画溝123SDより新しい溝で、さらに北側へ伸びると考えられる。この溝からは、大形の土師器皿12枚と小皿1枚が狭い範囲からまとまって出土している。時期は16世紀前半であり、南側の区画溝よりはやや古い可能性がある。

調査区全景



野添遺跡遺構全体図 (S=1/1000)



野添遺跡 C 区の遺構全体図 (S=1/300)

２２Ｂｂ区　Bb区は、調査区北側にBb区まで伸びる区画溝が併行して2条検出され、調査区西側では掘立柱建物跡05が検出された。調査区西側では、C区方向へ伸びる区画溝も確認されるが、現道下で屈曲すると考えられる溝もある。掘立柱建物跡05は、区画溝を壊して柱穴が構築されているものもあるため、17世紀前半よりも新しいと考えられる。

２２Ｂａ区　Ba区は、調査区北側で区画溝と掘立柱建物跡06からなる区画が検出された。この区画の区画溝は、断面形状がV字状となり、柵列を伴うと考えられる柱穴が複数検出されている。

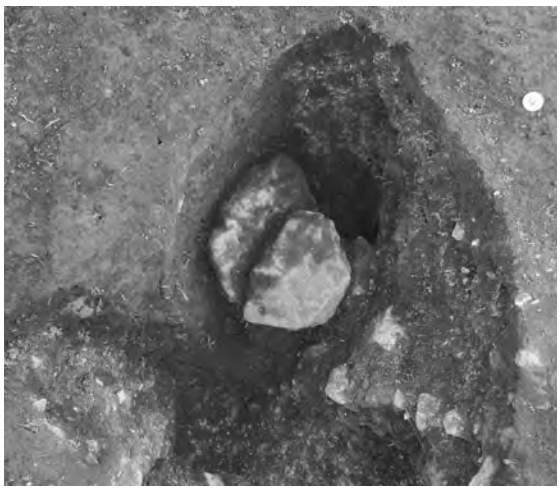
調査区南西側では、掘立柱建物跡07が検出され、周辺に区画溝がないことから、掘立柱建物跡05と同様、区画よりも新しい時期の遺構と考えられる。

また、調査区南側では、山茶碗が2枚重なって出土した土坑801SKが検出された。中世まで遡る遺構は、今回の調査ではこの事例のみである。

２２Ａ区　A区では、調査区南西側で根石を伴う掘立柱建物跡08が検出された。時期は、掘立柱建物跡05や掘立柱建物跡07と同じように、区画溝を伴わないことと、根石をもつ柱穴で構成されることから、17世紀前半以降と考えられる。また、調査区東側に遺構が全くないことと、東側は低地に向かって急激に傾斜していることから、この調査区はちょうど集落の縁辺部にあたる可能性が高い。

ま　と　め　今回の調査では、16世紀から17世紀前半の集落が検出された。特に22C区では、北と南に2区画検出され、区画溝や柱穴からは16世紀から17世紀前半にかけての陶器や磁器、内耳鍋などの土師器が出土している。これらの出土遺物から、地方領主の屋敷地であったと推察される。『八名郡史』には、「徳川家康の時代に、吉田城領主から寺領を寄進される」との記載があり、遺跡の北側には臨済宗長谷寺があることから、この寺院に関連する遺構である可能性が考えられる。また、Ba区では801SKが検出され、区画溝の埋土などからも山茶碗片が出土しているため、中世まで集落の痕跡が遡れることが判明した。

平成25年度調査区とは、異なる時代の遺構が検出されたが、出土遺物には古代以前の遺物も含まれるため、今回の調査区にも古代以前の遺構があったと考えられるが、16世紀以降の造成により、遺構としては残っていなかったと考えられる。　(田中　良)



掘立柱建物跡 08　根石を伴う柱穴

山茶碗を伴う土坑 801SK